「相手を思う～一如の教え」

●夢に想う

スイスの精神医学者として著名な、C. G. ユングは、自身を「魂の医者」とも呼んだそうです。
『ユングの生涯』（河合隼雄著、1978）によれば、彼は9歳の頃、次のような「想像の遊び」をしていたそうです。
好きな石の上に座り、「私はこの石の上に坐って、石は私の下にある」と考えながら、石の方でも、「私はここに横たわり、彼（幼いユング）は私の上にのっている」と考えることもできる。
そうすると、「私は石の上に坐っている人なのか、それとも、私が石で彼（ユング）が坐っているのか」分からなくなり、「一体、誰が何なのか」全くはっきりしなくなり、そのような感覚、謎に魅せられて何時間も石の上に坐っていることもあったといいます。
同著には、まるで、中国の「荘子の胡蝶（こちょう）の夢を思わせる」ようだとコメントがありました（胡蝶の夢:荘子は、蝶になっている夢を見ていて目が醒めたが、自分が蝶になった夢をみていたのか、それとも今の自分は蝶が見ている夢なのかという逸話）。
私がいて相手がある、と考えます。しかしそれは、相手がいてくれるからこそ、私が成り立つということでもあります。

●マインドする

この本の著者、河合隼雄氏の『河合隼雄自伝～未来への記憶』（同著、2015）に、私にとって、今の話と無関係とは思えない逸話がありました。
アメリカに留学していた若き日の河合氏が、精神医学の研究を進めるために、自分自身が被験者として精神分析を受けることになります。
当時、精神分析の料金が1回、25ドルもかかりましたが、先輩医師は経済的に余裕のない河合氏に、

「分析料は1ドルでいい、アイドントマインド（何とも思ってない）」

といいます。
河合氏は、最初それを拒みます。しかし、やがてその申し出を受けとめながらも、心の中で葛藤を起こして、

「あなたは、マインドしないが、ぼくは永久にマインドする」

と言うと、先輩は喜び、

「それならマインドしたらよろしい、でも料金は1ドルにしよう」

と言います。
河合氏は、

「ああ、ここであなたがぼくにしてくれたことをぼくはどこかでするだろう。それはあなたに対して払うんじゃないけど、あなたのしたことの意味をくんで行うのです」

と答え、そして、その後の人生で、自分はそれをしているのだと書いていました。

●ご恩に報いる～クリタ・ジュニャ

一月は、親鸞聖人の御正忌報恩講（ごしょうき ほうおんこう）です。
阿弥陀如来のご本願が勧めてくださる、お念仏の信心を私たちに示してくださった親鸞聖人の生き方を思い、それに報いる法要です。
聖人は、信心を浄土の大菩提心と示され、それを願作仏心（がんさぶっしん）、度衆生心（どしゅじょうしん）と明かします。
そして、度衆生心を、「よろづの有情を仏に作（な）さんと思う心」と示されています。あらゆる人びとを真実に目ざめさせようという心といえるでしょうか。
私たちは、自分と相手を分別し分けて考える時、自分さえよければいいという行いにつながります。
しかし、どこかで、私と相手は、分けられない、相手のしてくれたことによって自分が成り立っていると思う生き方が育つと、無分別の生き方、つまり相手を自分のように大切に思う、一つ如し、一如の生き方につながるように思います。
遠く遥かに、親鸞聖人が教えてくださった生き方、つまり、信心をよろこぶところに報恩のおもいが恵まれます。
恩とは、インドの言葉、クリタ・ジュニャともいわれます。
私のために仏さまが為されたこと（クリタ）を知る（ジュニャ）ならば、当たり前の道理として、今度は他者の為に、この私がそれをしていこうという生き方が恵まれます。
一如の心を恵まれて、分別している自分を知らされると、大切なことは何かと思い巡らす心が育てられます。

合掌

万行寺第十八世住職　釋静芳（本多 静芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様・御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様・御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。